

(表 2-9-6-1) 絶対にやってはいけない対応

	有効回答数	尿意や便意のサインを無視し放っておく	失敗をしかる	衣類等の汚れを見て見ぬふりして交換しない	自力でトイレに行ったとき、そのまま見過ごす	強制・命令・指示的な声かけ	オムツ・紙パンツの安易な使用	無理にトイレに連れて行く	子供を扱うような言い方	他利用者に聞こえるようなトイレ誘導、ことばかけ	失敗が周囲の人にわかるような言動	その他
実数	255	248	247	237	187	249	193	222	237	214	244	24
パーセント	100.0	97.3	96.9	92.9	73.3	97.6	75.7	87.1	92.9	83.9	95.7	9.4

9. 放尿への成功事例調査

1) 回答者属性

本調査の回答 280 件における回答者の年齢、性別、職名、役職、資格、所属事業種、勤続年数、総介護経験年数について割合を算出した。

(1) 年齢

有効回答 273 件における回答者の平均年齢は、42.0 歳 (SD11.7 歳) で最少年齢が 21 歳、最高年齢が 85 歳であった。(表 2-10-1-1 参照)

(2) 性別割合

有効回答 277 件中、回答者の性別割合は男性が 65 件 (23.5%)、女性が 212 件 (76.5%) と女性の割合が多かった。(表 2-10-1-2 参照)

(3) 職名の割合

有効回答 259 件中、回答者の職名の割合はケアマネージャーが 96 件 (37.1%)、ケアワーカーが 90 件 (34.7%)、看護師が 19 件 (7.3%)、相談員が 9 件 (3.5%) となっている。(表 2-10-1-3 参照)

(4) 役職の割合

有効回答 272 件中、回答者の役職の割合は、管理者が 94 件 (34.6%)、主任・リーダーが 74 件 (27.2%)、施設長が 22 件 (8.1%)、理事長が 4 件 (1.5%)、事務長が 1 件 (0.4%) で、77 件 (28.3%) が役職なしであった。(表 2-10-1-4 参照)

(5) 資格の所有割合

有効回答 264 件中、回答者の資格の所有割合は、介護福祉士が 167 件 (63.3%)、ケアマネージャーが 120 件 (45.5%)、ヘルパーが 83 件 (31.4%)、看護師 (准看護師) が 41 件 (15.5%)、社会福祉士が 8 件 (3.0%) であった。(表 2-10-1-5 参照)

(6) 所属事業種の割合

有効回答 276 件中、回答者の所属事業種は認知症対応型共同生活介護事業が 267 件 (96.7%)、小規模多機能型通所介護事業が 4 件 (1.4%)、介護老人福祉施設 (ユニット型) が 3 件 (1.1%)、介護老人福祉施設が 2 件 (0.7%) であった。(表 2-10-1-6 参照)

(7) 所属事業所での勤続年数

有効回答 275 件中、回答者の所属事業所での平均勤続年数は、4.0 年 (SD2.9 年) で最少が 0.1 年、最高が 20.0 年であった。(表 2-10-1-7 参照)

(8) 総介護経験年数

有効回答 273 件中、回答者の総介護経験の平均年数は、9.8 年 (SD6.5 年) で最少が 0.9 年、最高が 41.3 年であった。(表 2-10-1-8 参照)

2) 放尿の解決経験

本調査に回答を得た 280 件における放尿の解決経験、解決した高齢者に関する年齢、性別、認知症の原因疾患、身体機能の障害とADL、認知症の重症度、身体障害の重症度について割合を算出するとともに、介助や重症度などによるパターン化を行った。

(1) 解決経験の有無

有効回答 273 件中、放尿で解決経験があるのは 245 件 (89.7%) であった。(表 2-10-2-1 参照)

(2) 高齢者の状態

① 年齢

解決経験がある 245 件のうち有効回答 228 件における高齢者の平均年齢は、82.3 歳 (SD7.1 歳) で最少年齢が 53 歳、最高年齢が 97 歳であった。その分布をみると、80 歳～84 歳が 81 件 (35.5%) で最も多い。(表 2-10-2-2 参照)

② 性別

性別割合は、有効回答 239 件中、男性が 86 件 (36.0%)、女性が 153 件 (64.0%) と女性が多い。(表 2-10-2-3 参照)

③ 認知症の原因疾患

認知症の原因疾患は、有効回答 236 件中、アルツハイマー型が 154 件 (65.3%)、脳血管疾患型が 48 件 (20.3%)、前頭側頭型が 1 件 (0.4%)、混合が 16 件 (6.8%) であった。(表 2-10-2-4 参照)

④ 身体機能の障害とADL

【機能障害部位】

機能障害部位は、有効回答 245 件中、下肢が 39 件 (15.9%)、体幹が 5 件 (2.0%)、首が 1 件 (0.4%) であり、残りの 200 件 (81.6%) が機能障害なし (=無回答) であった。(表 2-10-2-5 参照)

【食事介助】

食事介助は、有効回答 233 件中、自立が 154 件 (66.1%)、一部介助が 74 件 (31.8%)、全介助が 5 件 (2.1%) であった。(表 2-10-2-6 参照)

【移動】

移動は、有効回答 215 件中、短距離歩行自立が 124 件 (57.7%)、長距離歩行自立が 68 件 (31.6%)、杖自立が 22 件 (10.2%) であった。(表 2-10-2-7 参照)

【排泄】

排泄は、有効回答 210 件中、身体介助必要が 93 件 (44.3%)、身体介助必要なしが 117 件 (55.7%) であった。(表 2-10-2-8 参照)

【入浴】

入浴は、有効回答 235 件中、全介助が 40 件 (17.0%)、移動介助が 35 件 (14.9%)、洗身洗髪介助が 94 件 (40.0%)、その他一部介助が 57 件 (24.3%) であった。
(表 2-10-2-9 参照)

⑤ 認知症の重症度

認知症の重症度は、有効回答 241 件中、ランク I が 7 件 (2.9%)、ランク II が 43 件 (17.8%)、ランク III が 113 件 (46.9%)、ランク IV が 70 件 (29.0%)、ランク V が 8 件 (3.3%) であった。(表 2-10-2-10 参照)

⑥ 身体障害の重症度

身体障害の重症度は、有効回答 233 件中、J ランクが 32 件 (13.7%)、A ランクが 169 件 (72.5%)、B ランクが 31 件 (13.3%)、C ランクが 1 件 (0.4%) であった。(表 2-10-2-11 参照)

⑦ 高齢者パターン

高齢者の状態を総合的にみてパターン化するために、性別、排泄介助、認知症の重症度、身体障害の重症度の 4 項目を対象にして潜在クラス分析(注 1)を行った結果 2 パターンが可能となった。

第 1 パターンは、排泄介助で身体介助必要 (66.1%) が多く、身体障害の重症度で B ランク (22.9%) と A ランク (68.1%) に集中し、認知症の重症度でランク IV (46.5%) とランク III (47.4%) が多いことから、これを「介助、中高程度重症度」と解釈した。このパターンには、有効回答 177 件のうち 97 件 (54.8%) が該当する。

第 2 パターンは、排泄介助で身体介助必要なし (84.9%) が多く、身体障害の重症度で A ランク (79.9%) と J ランク (16.6%) が多く、認知症の重症度でランク II (40.2%) とランク III (42.5%) が多いことから、これを「自立、軽中程度重症度」と解釈した。このパターンには 80 件 (45.2%) が該当する。
(表 2-10-2-12 参照) (潜在クラスモデルの評価経緯は表 2-10-2-13 参照)

(注 1) 潜在クラス分析について

潜在クラス分析は、全体集団から異質な部分集団の混在を識別する分析モデルである。
高齢者全体集団でみたとき、性別、排泄介助、認知症の重症度、身体障害の重症度の 4 項目間に関連があれば異質な部分集団が混在していると考えて、項目間の関連がない部分集団 (これをクラスと呼ぶ) を識別する。具体的には、同一クラス内では対象 4 項目間の関連がなくなるように識別し、項目間の関連がなくなることを局所独立と呼ぶ。
クラス数は任意であるが、多くすれば局所独立が高まる反面モデルとしての適切さが損なわれる。適切なモデル (クラス数) を評価する指標として AIC や BIC などの情報量規準が用いられ、その数値が低い方が良いとされている。なおここで示すクラス毎の事例件数は確率的に求めた件数である (注 2 参照)。分析ソフトは “LatentGOLD” を用いた。

3) 解決前と解決後の変化

放尿で解決経験がある 245 件における、解決前の状況と解決後の状況について割合を算出するとともに、解決前後の関連を分析し、高齢者パターンによる差異も確認した。

(1) 解決前の状況

放尿が解決される前の状況としては、有効回答 245 件中、「居室のすみにおしっこをしていた」が 122 件 (49.8%)、「居室のゴミ箱やあちこちに放尿していた」が 114 件 (46.5%)、「廊下やリビングのすみで、時々放尿していた」が 62 件 (25.3%)、「夜間のみ窓・ドアを開けて放尿したり、ゴミ箱や洗面器などに放尿することがあった」が 38 件 (15.5%)、「屋外の庭でたまに放尿していた」が 22 件 (9.0%)、「衣装ケースの中に放尿していた」が 10 件 (4.1%) であった。(表 2-10-3-1 参照)

(2) 解決後の状況

放尿が解決された後の状況としては、有効回答 244 件中、「ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った」が 117 件 (48.0%)、「自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった」が 71 件 (29.1%)、「失敗することもほとんどなくなった」が 43 件 (17.6%)、「自らおしっこに行きたいと訴えるようになった」と「夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった」が各 26 件 (10.7%) であった。(表 2-10-3-2 参照)

(3) 解決前後の関連

解決前後それぞれの項目重複による影響排除のために、パターン化を経て分析することにした。

① 解決前のパターン

パターン化に用いた方法は潜在クラス分析である。

解決前は 6 パターンであり、第 1 は、居室のゴミ箱やあちこちに放尿していた (99.7%) に加えて、「居室のすみにおしっこをしていた」 (13.7%) を若干伴っている。これに該当する事例が 43 件 (28.3%) であり、「居室のゴミ箱やあちこちに放尿していた」パターンと表示する。

第 2 は、「居室のすみにおしっこをしていた」 (99.7%) に加えて、「居室のゴミ箱やあちこちに放尿していた」 (11.3%) を若干伴っている。これに該当する事例が 37 件 (24.3%) であり、「居室のすみにおしっこをしていた」パターンと表示する。

第 3 は、「廊下やリビングの角で、時々放尿していた」 (98.9%) に加えて、「居室のすみにおしっこをしていた」 (41.2%) や「居室のゴミ箱やあちこちに放尿していた」 (21.5%) を伴っている。これに該当する事例が 23 件 (15.1%) であり、「居室のすみや、ゴミ箱や、廊下やリビングのすみで時々放尿していた」

パターンと表示する。

第4は、「居室のすみにおしっこをしていた」(99.0%)、「居室のゴミ箱やあちこちに放尿していた」(97.1%)、「廊下やリビングのすみで、時々放尿していた」(95.2%)に加えて、「夜間のみ窓・ドアを開けて放尿したり、ゴミ箱や洗面器などに放尿することがあった」(20.5%)や「衣装ケースの中に放尿していた」(14.1%)を多少伴うなど多様な状況を呈している。これに該当する事例が21件(13.8%)であり、「方々で放尿していた」パターンと表示する。

第5は、「夜間のみ窓・ドアを開けて放尿したり、ゴミ箱や洗面器などに放尿することがあった」(98.8%)に加えて、「居室のすみにおしっこをしていた」(20.4%)を多少伴っている。これに該当する事例が19件(12.5%)であり、「夜間のみ窓・ドアを開けて放尿したり、ゴミ箱や洗面器などに放尿することがあった」パターンと表示する。

第6は、「屋外の庭でたまに放尿していた」(69.6%)または「衣装ケースの中に放尿していた」(26.3%)が主体である。これに該当する事例が8件(5.3%)であり、「屋外の庭、または衣装ケースの中に放尿していた」パターンと表示する。(表2-10-3-3参照)(潜在クラスモデルの評価経緯は表2-10-3-4参照)

② 解決後のパターン

解決後は5パターンであり、第1は、「ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った」(99.9%)に集中している。これに該当する事例が64件(42.1%)であり、「ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った」パターンと表示する。

第2は、「自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった」(99.5%)に加えて、「ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った」(18.1%)を多少伴っている。これに該当する事例が39件(25.7%)であり、「自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった」パターンと表示する。

第3は、「失敗することもほとんどなくなった」(98.8%)に加えて、「夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった」(14.2%)を多少伴っている。これに該当する事例が18件(11.8%)であり、「失敗することもほとんどなくなった」パターンと表示する。

第4は、「夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった」(97.3%)に加えて、「ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った」(42.9%)や「自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった」(24.6%)を伴っている。これに該当する事例が17件(11.2%)であり、「放尿回数や夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった」パターンと表示する。

第5は、「自らおしっこに行きたいと訴えるようになった」(95.8%)に加えて、「自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった」(49.5%)や「ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った」(36.5%)を伴っている。これに該当す

る事例が14件(9.2%)であり、“放尿回数が減り、自らおしっこに行きたいと訴えるようになった”パターンと表示する。(表2-10-3-5参照)(潜在クラスモデルの評価経緯は表2-10-3-6参照)

③ 解決前後のパターンの関連

各パターンへの帰属確率の相関によって解決前後の関連分析をした。

相関は正負両方表れるが、ここでは「解決前どうであったのが解決後どうなった」という関連をみる観点から正相関にのみ着目する。そしてまず全体的な傾向をみた上で、高齢者パターンによる差異を確認する。

まず全体では3つの変化傾向がみられる。1つめは、解決前パターン4(方々で放尿していた)から、解決後パターン5(放尿回数が減り、自らおしっこに行きたいと訴えるようになった)へと変化する傾向であり、有意水準1%で相関が認められる。

2つめは、解決前パターン6(屋外の庭、または衣装ケースの中に放尿していた)から、解決後パターン3(失敗することもほとんどなくなった)へと変化する傾向であり、有意水準1%で相関が認められる。

3つめは、解決前パターン5(夜間のみ窓・ドアを開けて放尿したり、ゴミ箱や洗面器などに放尿することがあった)から、解決後パターン2(自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった)へと変化する傾向であり、有意水準5%で相関が認められる。(表2-10-3-7参照)

次に高齢者パターン1(介助、中高程度重症度)に限定してみると、上記の全体的傾向の1つめ、解決前パターン4(方々で放尿していた)から、解決後パターン5(放尿回数が減り、自らおしっこに行きたいと訴えるようになった)へと変化する傾向であり、有意水準1%で相関が認められる。(表2-10-3-8参照)

高齢者パターン2(自立、軽中程度重症度)に限定してみると、全体的傾向同様の3つの傾向に加えて、解決前パターン3(居室のすみや、ゴミ箱や、廊下やリビングのすみで時々放尿していた)から、解決後パターン4(放尿回数や夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった)へと変化する傾向もみられ、有意水準5%で相関が認められる。(表2-10-3-9参照)

このように、解決前後の変化は高齢者パターンによってやや異なった傾向を示している。

(4) 高齢者パターン別にみた解決前後の状況

そこで高齢者パターン別にみた解決前後の状況を分析した(注2)。

解決前の状況は、高齢者パターン1(介助、中高程度重症度)では「居室のすみにおしっこをしていた」(56.0%)と「廊下やリビングのすみで、時々放尿していた」(34.5%)が高齢者パターン2(自立、軽中程度重症度)のそれら(45.6%と25.0%)を上回っている。(表2-10-3-10参照)

解決後の状況は、高齢者パターン1（介助、中高程度重症度）では「ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った」（61.9%）で高齢者パターン2（自立、軽中程度重症度）のそれ（47.1%）を上回り、高齢者パターン2では「自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった」（42.6%）で高齢者パターン1のそれ（26.2%）を上回っている。（表2-10-3-11参照）

（注2）潜在クラスとの関連分析には帰属確率を用いる

潜在クラスは各クラスへの帰属関係を確率的に表すことから、クラスと他の項目との関連分析に際しても、その確率で表すのが適切である。

例えば、ある事例の帰属確率が、クラス1に対して0.97、クラス2に対して0.03、（全クラスへの帰属確率合計は1.00である）となっている場合、関連分析する項目に対しても同じ確率を適用する。

4) 放尿の解決方法

放尿で解決経験がある245件における、解決方法の割合を算出するとともに、解決方法をパターン化して、どのパターンがどのような結果に貢献するのか、さらにその貢献は高齢者パターンでどう異なるのか分析した。

(1) 解決方法の概況

放尿を解決する時に行った方法を具体的に記入してもらい、その内容を検討評価して23分類した。分類結果は、誘導の工夫に関するものが8分類、環境調整に関するものが7分類、その他が8分類であった。

有効回答245件のなかで多くあがったものは、「状態に応じた」が163件(66.5%)、「排尿パターンに応じ」が151件(61.6%)、「トイレ表示の工夫」が105件(42.9%)、「誘導回数を増やす」が86件(35.1%)、「繰り返し説明」が60件(24.5%)、「夜間照明」が59件(24.1%)、「ポータブルトイレ」が51件(20.8%)、「トイレが見えるよう」が38件(15.5%)、「トイレの位置調整」が31件(12.7%)、「薬調整、受診」が28件(11.4%)などであり、1事例あたり平均3.4項目であった。

（表2-10-4-1参照）

(2) 解決方法の組み合わせパターン

23分類のなかから1事例平均3.4の方法で構成されているのを実際の組み合わせに高い確率で近似するパターンを得るために潜在クラス分析を応用した（注3）。

その結果19の組み合わせパターンを得た。

第1パターンは平均3.8項目の組み合わせであり、「トイレ表示の工夫」(99.7%)と「状態に応じた」(99.7%)を共通ベースとして、「排尿パターンに応じ」(71.5%)、「夜間照明」(35.7%)、「誘導回数を増やす」(30.6%)などで構成されている。第1パターンの該当事例は28件(11.4%)である。

第 2 パターンは平均 2.2 項目の組み合わせであり、「排尿パターンに応じ」(99.7%)を共通ベースとして、「状態に応じた」(69.4%)他で構成されている。第 2 パターンに該当する事例は 26 件 (10.6%) である。

第 3 パターンは平均 2.8 項目の組み合わせであり、「ポータブルトイレ」(99.2%)を共通ベースとして、「排尿パターンに応じ」(53.3%)、「状態に応じた」(47.2%)、「トイレの位置調整」(31.6%)などで構成されている。第 3 パターンに該当する事例は 25 件 (10.2%) である。

第 4 パターンは平均 1.7 項目と最少の組み合わせであり、「状態に応じた」(45.0%)、「放尿場所の遮断」(33.7%)、「トイレ表示の工夫」(30.1%)などに分散して構成されている。第 4 パターンに該当する事例は 21 件 (8.6%) である。

第 5 パターンは平均 2.7 項目の組み合わせであり、「排泄パターンに応じ」(99.3%)と「誘導回数を増やす」(98.9%)を共通ベースとして、「状態に応じた」(44.0%)などで構成されている。第 5 パターンに該当する事例は 19 件 (7.8%) である。

第 6 パターンは平均 3.6 項目の組み合わせであり、「繰り返し説明」(98.8%)と「排尿パターンに応じ」(93.3%)を共通ベースとして、「トイレ表示の工夫」(68.8%)、「状態に応じた」(33.0%)、「トイレの位置調整」(31.2%)などで構成されている。第 6 パターンに該当する事例は 19 件 (7.8%) である。

第 7 パターンは平均 5.3 項目の組み合わせであり、「排尿パターンに応じ」(99.8%)と「状態に応じた」(87.2%)を共通ベースとして、「繰り返し説明」(77.8%)、「誘導回数を増やす」(73.1%)、「トイレが見えるよう」(67.0%)、「ポータブルトイレ」(29.7%)などで構成されている。第 7 パターンに該当する事例は 18 件 (7.3%) である。

第 8 パターンは平均 3.2 項目の組み合わせであり、「誘導回数を増やす」(98.8%)を共通ベースとして、「状態に応じた」(71.9%)、「トイレ表示の工夫」(54.4%)、「夜間照明」(33.0%)、「繰り返し説明」(26.7%)などで構成されている。第 8 パターンに該当する事例は 17 件 (6.9%) である。

第 9 パターンは平均 2.4 項目の組み合わせであり、「状態に応じた」(99.8%)を共通ベースとして、「夜間照明」(55.9%)、「繰り返し説明」(45.9%)などで構成されている。第 9 パターンに該当する事例は 11 件 (4.5%) である。

第 10 パターンは平均 3.2 項目の組み合わせであり、「状態に応じた」(99.8%)と「薬調整、受診」(83.3%)を共通ベースとして、「トイレ表示の工夫」(56.6%)、「ポータブルトイレ」(33.2%)などで構成される。第 10 パターンに該当する事例は 11 件 (4.5%) である。

第 11 パターンは平均 6.1 項目と最多の組み合わせであり、「状態に応じた」(99.8%)、「排尿パターンに応じ」(99.7%)、「誘導回数を増やす」(99.6%)、「薬調整、受診」(83.3%)の 4 項目を共通ベースとして、「トイレ表示の工夫」(77.2%)、

「トイレが見えるよう」(52.8%)、「トイレの位置調整」(34.4%)などで構成される。第11パターンに該当する事例は9件(3.7%)である。

第12パターンは平均4.9項目の組み合わせであり、「状態に応じた」(99.7%)、「トイレ表示の工夫」(97.8%)、「排尿パターンに応じ」(83.1%)の3項目を共通ベースとして、「トイレが見えるよう」(71.8%)、「繰り返し説明」(70.7%)、「放尿場所の遮断」(36.2%)などで構成されている。第12パターンに該当する事例は8件(3.3%)である。

第13パターンは平均4.0項目の組み合わせであり、「トイレが見えるよう」(98.6%)と「夜間照明」(87.4%)を共通ベースとして、「状態に応じた」(74.7%)、「トイレ表示の工夫」(61.7%)、「トイレの位置調整」(37.2%)、「繰り返し説明」(36.9%)などで構成されている。第13パターンに該当する事例は8件(3.3%)である。

第14パターンは平均2.9項目の組み合わせであり、「誘導回数を増やす」(99.1%)を共通ベースとして、「トイレ表示の工夫」(71.4%)、「トイレが見えるよう」(53.7%)、「ポータブルトイレ」(41.3%)などで構成されている。第14パターンに該当する事例は6件(2.4%)である。

第15パターンは平均3.2項目の組み合わせであり、「排尿パターンに応じ」(99.2%)と「トイレ表示の工夫」(99.0%)を共通ベースとして、「薬調整、受診」(55.9%)、「状態に応じた」(27.1%)などで構成されている。第15パターンに該当する事例は5件(2.0%)である。

第16パターンは平均3.0項目の組み合わせであり、「排尿パターンに応じ」(99.3%)と「夜間照明」(98.1%)を共通ベースとして、「トイレ表示の工夫」(55.3%)、「ポータブルトイレ」(42.8%)などで構成されている。第16パターンに該当する事例は5件(2.0%)である。

第17パターンは平均5.8項目の組み合わせであり、「ポータブルトイレ」(98.9%)と「トイレの位置調整」(98.2%)を共通ベースとして、「排尿パターンに応じ」(73.9%)、「誘導回数を増やす」(71.5%)、「夜間照明」(70.6%)、「薬調整、受診」(50.4%)などで構成されている。第17パターンに該当する事例は4件(1.6%)である。

第18パターンは平均4.3項目の組み合わせであり、「状態に応じた」(99.4%)と「誘導回数を増やす」(98.9%)を共通ベースとして、「排尿パターンに応じ」(67.1%)、「トレイに誘導する」(32.6%)、「同性誘導」(32.5%)などで構成されている。第18パターンに該当する事例は3件(1.2%)である。

第19パターンは平均5.0項目の組み合わせであり、「状態に応じた」(99.1%)、「排尿パターンに応じ」(99.0%)、「夜間照明」(98.0%)、「放尿場所の遮断」(97.5%)の4項目を共通ベースとして、「薬調整、受診」(49.0%)などで構成されている。第19パターンに該当する事例は2件(0.8%)である。(表2-10

－ 4 － 2 参照) (潜在クラスモデルの評価経緯は表 2－10－4－3 参照)

(注 3) 組み合わせパターンへの潜在クラス分析の応用

潜在クラス分析は(注 1) に示したような局所独立を仮定して異質な部分集団を識別し、モデルの適切さを情報量規準で評価するのが一般的である。ここでは組み合わせパターンを一定水準以上に明確にすることを優先して、情報量規準によるモデル評価をある程度逸脱するのも良しとした。しかしながらモデルの極度な不適切を回避するために、“LatentGold” が算出する “Classification Statistics” (分類精度情報) の各指標を総合的に評価して局所独立の追及を優先したモデルを定めた。

ここで表す各パターンの該当件数も確率から整数換算した結果である。

(3) 解決方法の組み合わせパターンの貢献

このような解決方法がどんな結果に貢献するのか、19 の組み合わせパターンと解決後のパターンの相関を分析した後、参考までに個別状況との関連を確認する。

まず、解決方法の組み合わせ 19 パターンと解決後の 5 パターンの帰属確率による相関分析を行うと、4 通りの相関が認められる。(事例 1 件の解決方法パターン 18 はとりあげない。)

1 つめは、解決方法パターン 10 と解決後パターン 5 の相関が有意水準 1% で認められる。解決方法パターン 10 は、“「状態に応じた」と「薬調整、受診」を共通ベースとして、「トイレ表示の工夫」、「ポータブルトイレ」などで構成された平均 3.2 項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 5 の“放尿回数が減り、自らおしっこに行きたいと訴えるようになった”という結果に貢献している傾向が読み取れる。

2 つめは、解決方法パターン 14 と解決後パターン 4 の相関が有意水準 1% で認められる。解決方法パターン 14 は、“「誘導回数を増やす」を共通ベースとして、「トイレ表示の工夫」、「トイレが見えるよう」、「ポータブルトイレ」などで構成された平均 2.9 項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 4 の“放尿回数や夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった”に貢献している傾向が読み取れる。

3 つめは、解決方法パターン 15 と解決後パターン 4 の相関が有意水準 1% で認められる。解決方法パターン 15 は、“「排尿パターンに応じ」と「トイレ表示の工夫」を共通ベースとして、「薬調整、受診」、「状態に応じた」などで構成された平均 3.2 項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 4 の“放尿回数や夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった”に貢献している傾向が読み取れる。

4 つめは、解決方法パターン 13 と解決後パターン 2 の相関が有意水準 5% で認められる。解決方法パターン 13 は、“「トイレが見えるよう」と「夜間照明」を共

通ベースとして、「状態に応じた」、「トイレ表示の工夫」、「トイレの位置調整」、「繰り返し説明」などで構成された平均 4.0 項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 2 の“自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった”に貢献している傾向が読み取れる。(表 2-10-4-4 参照)

参考までに、解決後の各状況との関連を分析したクロス集計によっても、上記の傾向が確認できる。

解決方法パターン 10 では、解決後に“ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った”が 77.3%、“自らおしっこに行きたいと訴えるようになった”が 42.3%と多くなっており、これらは解決後パターン 5 の主要項目である。

解決方法パターン 14 では、解決後に“自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった”が 84.4%、“ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った”が 76.6%、“夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった”が 61.1%と多くなっており、これらは解決後パターン 4 の主要項目である。

解決方法パターン 15 では、解決後に“ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った”が 99.3%、“夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった”が 63.9%と多くなっており、これらは解決後パターン 4 の主要項目である。

解決方法パターン 13 では、解決後に“自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった”が 74.0%と多くなっており、これは解決後パターン 2 の主要項目である。(表 2-10-4-5 参照)

(4) 高齢者パターン別にみた、解決方法の組み合わせパターンの貢献

次に高齢者パターン 1 (介助、中高程度重症度) に限定した相関分析を行うと、5 通りの相関が認められる (注 4)。(事例 1 件の解決方法パターン 18 と同 16 はとりあげない。)

1 つめは、解決方法パターン 10 と解決後パターン 5 の相関が有意水準 1%で認められる。これは上記の全体的傾向と同様である。

2 つめは、解決方法パターン 14 と解決後パターン 4 の相関が有意水準 1%で認められる。これも上記の全体的傾向と同様である。

3 つめは、解決方法パターン 1 と解決後パターン 3 の相関が有意水準 1%で認められる。解決方法パターン 1 は、“「トイレ表示の工夫」と「状態に応じた」を共通ベースとして、「排尿パターンに応じ」、「夜間照明」、「誘導回数を増やす」などで構成された平均 3.8 項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 3 の“失敗することもほとんどなくなった”に貢献している傾向が読み取れる。

4 つめは、解決方法パターン 13 と解決後パターン 2 の相関が有意水準 5%で認められる。これも上記の全体的傾向と同様である。

5 つめは、解決方法パターン 7 と解決後パターン 5 の相関が有意水準 5%で認められる。解決方法パターン 7 は、“「排尿パターンに応じ」と「状態に応じた」を

共通ベースとして、「繰り返し説明」、「誘導回数を増やす」、「トイレが見えるよう」、「ポータブルトイレ」などで構成された平均 5.3 項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 5 の“放尿回数が減り、自らおしっこに行きたいと訴えるようになった”に貢献している傾向が読み取れる。(表 2-10-4-6 参照)

参考までに、解決後の各状況との関連を分析したクロス集計によってもこれらの傾向が確認できる。

解決方法パターン 10 では、解決後に“自らおしっこに行きたいと訴えるようになった”が 77.2%、“ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った”が 59.2%、“自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった”が 34.6%と多くなっており、これは解決後パターン 5 の主要項目である。

解決方法パターン 14 では、解決後に“自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった”が 99.6%、“ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った”が 80.4%、“夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった”が 80.0%と多くなっており、これは解決後パターン 4 の主要項目である。

解決方法パターン 1 では、解決後に“失敗することもほとんどなくなった”が 48.5%と多くなっており、これは解決後パターン 3 の主要項目である。

解決方法パターン 13 では、解決後に“自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった”が 66.4%と多くなっており、これは解決後パターン 2 の主要項目である。

解決方法パターン 7 では、解決後に“ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った”が 80.9%、“自らおしっこに行きたいと訴えるようになった”が 34.5%と多くなっており、これは解決後パターン 5 の主要項目である。(表 2-10-4-7 参照)

また高齢者パターン 2 (自立、軽中程度重症度)に限定した相関分析を行うと、5通りの相関が認められる。(事例 1 件の解決方法パターン 19 はとりあげない。)

1 つめは、解決方法パターン 15 と解決後パターン 4 の相関が有意水準 1%で認められる。これは上記の全体的傾向と同様である。

2 つめは、解決方法パターン 11 と解決後パターン 3 の相関が有意水準 1%で認められる。解決方法パターン 11 は、“「状態に応じた」、「排尿パターンに応じ」、「誘導回数を増やす」、「薬調整、受診」の 4 項目を共通ベースとして、「トイレ表示の工夫」、「トイレが見えるよう」、「トイレの位置調整」などで構成された平均 6.1 項目と最多の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 3 の“失敗することもほとんどなくなった”に貢献している傾向が読み取れる。

3 つめは、解決方法パターン 4 と解決後パターン 2 の相関が有意水準 1%で認められる。解決方法パターン 4 は、“「状態に応じた」、「放尿場所の遮断」、「トイレ表示の工夫」などに分散して構成された平均 1.7 項目と最少の組み合わせ”であ

り、これらの方法が、解決後パターン 2 の“自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった”に貢献している傾向が読み取れる。

4 つめは、解決方法パターン 10 と解決後パターン 1 の相関が有意水準 1%で認められる。解決方法パターン 10 は、“「状態に応じた」と「薬調整、受診」を共通ベースとして、「トイレ表示の工夫」、「ポータブルトイレ」などで構成された平均 3.2 項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 1 の“ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った”に貢献している傾向が読み取れる。

5 つめは、解決方法パターン 2 と解決後パターン 3 の相関が有意水準 5%で認められる。解決方法パターン 2 は、“「排尿パターンに応じ」を共通ベースとして、「状態に応じた」他で構成された平均 2.2 項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 3 の“失敗することもほとんどなくなった”に貢献している傾向が読み取れる。(表 2-10-4-8 参照)

参考までに、解決後の各状況との関連を分析したクロス集計によってもその傾向が確認できる。

解決方法パターン 15 では、解決後に“ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った”が 99.3%、“夜間トイレへ行く回数が減り、入眠するようになった”が 95.8%と多くっており、これは解決後パターン 4 の主要項目である。

解決方法パターン 11 では、解決後に“失敗することもほとんどなくなった”が 34.3%と多くっており、これは解決後パターン 3 の主要項目である。

解決方法パターン 4 では、解決後に“自らトイレへ歩いていき、排尿するようになった”が 85.1%と多くっており、これは解決後パターン 2 の主要項目である。

解決方法パターン 10 では、解決後に“ゴミ箱や部屋のすみに放尿する回数が減った”が 98.8%と多くっており、これは解決後パターン 1 の主要項目である。

解決方法パターン 2 では、解決後に“失敗することもほとんどなくなった”が 22.2%と相対的に多くっており、これは解決後パターン 3 の主要項目である。(表 2-10-4-9 参照)

(注 4) 高齢者パターン別分析の配慮

高齢者パターンと解決方法パターンの双方を潜在確率のまま解決後の状況とのクロス集計不能につき、ここでは便宜的に高齢者パターン 1 と 2 を明確に離散した。具体的には、高齢者パターンの潜在確率が大きい方に各事例を定義 (=クラスター化) した上で、解決方法パターンと解決後の状況のクロス集計を行った。このクロス集計でも前記同様に帰属確率を用いた。

5) 放尿の解決に役立った情報

上記の解決方法個々について、役立った情報をあげてもらった。

有効回答延べ 748 件の解決方法について、役立った情報の割合を算出するとともに、情報をパターン化して、どの情報パターンがどの解決方法に関連するのか分析した。

(1) 役立った情報の概況

有効回答 748 件のなかで多くあがったものは、「スタッフの声かけ内容・見守り方」が 264 件 (35.3%)、「排泄・排尿時間」が 203 件 (27.1%)、「排泄間隔」が 196 件 (26.2%)、「本人の気持ち、意志」が 179 件 (23.9%)、「排泄頻度」と「トイレの場所」が各 143 件 (19.1%)、「トイレの表示」が 113 件 (15.1%)、「尿意・排泄感覚」と「排泄場所」が各 112 件 (15.0%)、「放尿時の様子」が 89 件 (11.9%)、「スタッフとの関係」が 85 件 (11.4%) などであり、ひとつの解決方法当たり平均 3.2 項目あげられた。(表 2-10-5-1 参照)

(2) 役立った情報の組み合わせパターン

ここでも上記の解決方法同様に、実際の組み合わせに高い確率で近似する組み合わせパターンを得るために潜在クラス分析を応用した。

その結果 15 の組み合わせパターンを得た。

第 1 パターンは平均 2.2 項目の組み合わせであり、「トイレの表示」(64.7%) と「トイレの場所」(54.0%) を主として、「トイレの扉」(24.1%) などで構成されている。第 1 パターンの該当方法は延べ 105 件 (14.0%) である。

第 2 パターンは平均 3.7 項目の組み合わせであり、「排泄間隔」(93.0%) と「排泄頻度」(82.8%) を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(16.8%) などで構成されている。第 2 パターンの該当方法は延べ 104 件 (13.9%) である。

第 3 パターンは平均 3.4 項目の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(83.2%) を共通ベースとして、「本人の気持ち、意志」(58.9%)、「スタッフとの関係」(55.8%)、「気分」(36.5%) などで構成されている。第 3 パターンの該当方法は延べ 63 件 (8.4%) である。

第 4 パターンは平均 3.5 項目の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(80.2%) を共通ベースとして、「スタッフとの関係」(43.2%)、「放尿時の様子」(48.9%)、「放尿時の表情」(33.9%) などで構成されている。第 4 パターンの該当方法は延べ 57 件 (7.6%) である。

第 5 パターンは平均 2.7 項目の組み合わせであり、「トイレの場所」(55.5%)、「排泄場所」(42.2%)、「排泄・排尿時間」(22.2%)、「歩行・下肢機能」(22.0%)、「本人の気持ち、意志」(21.4%) などで構成されている。第 5 パターンの該当方法は延べ 56 件 (7.5%) である。

第 6 パターンは平均 3.9 項目の組み合わせであり、「排泄・排尿時間」(73.0%)、

「排泄間隔」(56.4%)、「尿意・排泄感覚」(47.1%)、「失禁有無」(41.9%)、「水分状態」(36.0%)、「本人の気持ち、意志」(28.0%)などで構成されている。第6パターンの該当方法は延べ51件(6.8%)である。

第7パターンは平均2.1項目と最少の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(37.2%)、「本人の気持ち、意志」(34.3%)、「生活習慣(ここ数年)」(32.9%)、「トイレの表示」(32.0%)などで構成されている。第7パターンの該当方法は延べ48件(6.4%)である。

第8パターンは平均2.8項目の組み合わせであり、「尿意・排泄感覚」(61.7%)、「本人の気持ち、意志」(59.8%)、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(55.0%)などで構成されている。第8パターンの該当方法は延べ47件(6.3%)である。

第9パターンは平均4.1項目と最多の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(82.1%)と「トイレの場所」(80.2%)を共通ベースとして、「トイレの表示」(47.2%)、「スタッフとの関係」(34.3%)、「排泄場所」(32.8%)、「見当識」(31.2%)などで構成されている。第9パターンの該当方法は延べ42件(5.6%)である。

第10パターンは平均3.6項目の組み合わせであり、「排泄間隔」(98.2%)を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(56.9%)、「排泄頻度」(40.2%)、「本人の気持ち、意志」(36.0%)、「尿意・排泄感覚」(33.1%)などで構成されている。第10パターンの該当方法は延べ41件(5.5%)である。

第11パターンは平均3.5項目の組み合わせであり、「放尿時の様子」(99.3%)を共通ベースとして、「本人の気持ち、意志」(53.2%)、「尿意・排泄感覚」(25.0%)、「排泄場所」(24.3%)、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(23.5%)などで構成されている。第11パターンの該当方法は延べ35件(4.7%)である。

第12パターンは平均3.3項目の組み合わせであり、「服薬状況」(67.2%)、「現病・既往歴」(58.7%)、「睡眠時間・状況」(37.9%)、「水分状態」(34.2%)、「失禁有無」(26.8%)など“健康面”を主として構成されている。第12パターンの該当方法は延べ31件(4.1%)である。

第13パターンは平均3.2項目の組み合わせであり、「排泄場所」(78.6%)、「生活状況(数日内)」(35.9%)、「排泄間隔」(33.3%)、「見当識」(32.5%)などで構成されている。第13パターンの該当方法は延べ28件(3.7%)である。

第14パターンは平均4.0項目の組み合わせであり、「尿意・排泄感覚」(74.0%)、「睡眠時間・状況」(57.8%)、「水分状態」(38.3%)、「失禁有無」(35.0%)、「排泄頻度」(32.4%)、「排泄場所」(30.2%)などで構成されている。第14パターンの該当方法は延べ25件(3.3%)である。

第15パターンは平均3.5項目の組み合わせであり、「生活状況(数日内)」(98.9%)を共通ベースとして、「排泄・排尿時間」(47.1%)、「排泄間隔」(42.3%)、「睡眠時間・状況」(31.0%)などで構成されている。第15パターンの該当方法

は延べ 16 件 (2.1%) である。(表 2-10-5-2 参照) (潜在クラスモデルの評価経緯は表 2-10-5-3 参照)

(3) 情報の組み合わせパターンが関連する解決方法

上記の情報組み合わせがどの解決方法に関連するか分析すると次の傾向である。

第 2 パターン (「排泄間隔」と「排泄頻度」を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」などで構成された平均 3.7 項目の組み合わせ) は、「排尿パターンに応じ」が 63.7%、「誘導回数を増やす」が 23.2% と多い。

第 12 パターン (「服薬状況」、「現病・既往歴」、「睡眠時間・状況」、「水分状態」、「失禁有無」など“健康面”を主として構成された平均 3.3 項目の組み合わせ) は、「薬調整、受診」が 61.5% と多い。

第 1 パターン (「トイレの表示」と「トイレの場所」を主として、「トイレの扉」などで構成された平均 2.2 項目の組み合わせ) は、「トイレ表示の工夫」が 50.1%、「夜間照明」が 20.2% と多い。

第 6 パターン (「排泄・排尿時間」、「排泄間隔」、「尿意・排泄感覚」、「失禁有無」、「水分状態」、「本人の気持ち、意志」などで構成された平均 3.9 項目の組み合わせ) は、「排尿パターンに応じ」が 47.5%、「誘導回数を増やす」が 26.7% と多い。

第 8 パターン (「尿意・排泄感覚」、「本人の気持ち、意志」、「スタッフの声かけ内容・見守り方」などで構成された平均 2.8 項目の組み合わせ) は、「状態に応じた」が 45.8% と多い。

第 11 パターン (「放尿時の様子」を共通ベースとして、「本人の気持ち、意志」、「尿意・排泄感覚」、「排泄場所」、「スタッフの声かけ内容・見守り方」などで構成された平均 3.5 項目の組み合わせ) は、「状態に応じた」が 45.7%、「ポータブルトイレ」が 15.2% と多い。

第 3 パターン (「スタッフの声かけ内容・見守り方」を共通ベースとして、「本人の気持ち、意志」、「スタッフとの関係」、「気分」などで構成された平均 3.4 項目の組み合わせ) は、「状態に応じた」が 44.7% と多い。

第 4 パターン (「スタッフの声かけ内容・見守り方」を共通ベースとして、「スタッフとの関係」、「放尿時の様子」、「放尿時の表情」などで構成された平均 3.5 項目の組み合わせ) は、「状態に応じた」が 41.1% と多い。

第 15 パターン (「生活状況 (数日内)」を共通ベースとして、「排泄・排尿時間」、「排泄間隔」、「睡眠時間・状況」などで構成された平均 3.5 項目の組み合わせ) は、「排尿パターンに応じ」が 34.8%、「状態に応じた」が 30.4% と多い。

第 14 パターン (「尿意・排泄感覚」、「睡眠時間・状況」、「水分状態」、「失禁有無」、「排泄頻度」、「排泄場所」などで構成された平均 4.0 項目の組み合わせ) は、「排尿パターンに応じ」が 34.1% と多い。

第 10 パターン (「排泄間隔」を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」、「排泄頻度」、「本人の気持ち、意志」、「尿意・排泄感覚」などで構成さ

れた平均 3.6 項目の組み合わせ)は、「状態に応じた」が 32.4%、「誘導回数を増やす」が 27.1%と多い。

第7パターン(「スタッフの声かけ内容・見守り方」、「本人の気持ち、意志」、「生活習慣(ここ数年)」、「トイレの表示」などで構成された平均 2.1 項目と最少の組み合わせ)は、「トイレ表示の工夫」が 29.2%と多い。

第9パターン(「スタッフの声かけ内容・見守り方」と「トイレの場所」を共通ベースとして、「トイレの表示」、「スタッフとの関係」、「排泄場所」、「見当識」などで構成された平均 4.1 項目と最多の組み合わせ)は、「繰り返し説明」が 22.0%、「トイレ表示の工夫」が 21.1%と多い。

第5パターン(「トイレの場所」、「排泄場所」、「排泄・排尿時間」、「歩行・下肢機能」、「本人の気持ち、意志」などで構成された平均 2.7 項目の組み合わせ)は、「ポータブルトイレ」が 21.3%、「夜間照明」が 15.0%と多い。(表 2-10-5-4 参照)

6) 絶対にやってはいけない対応

絶対にやってはいけない対応としては、有効回答 243 件中、「怒鳴ったり、しかったり、叱責する」が 241 件 (99.2%)、「拘束するような脱ぎにくい服にする」が 230 件 (94.7%)、「他の利用者の前で、その事について話しをする」が 218 件 (89.7%)、「放っておく」が 216 件 (88.9%)、「無理やりトイレに連れて行く」が 203 件 (83.5%)、「オムツにする」が 195 件 (80.2%) となっている。(表 2-10-6-1 参照)

(表 2-10-1-1) 回答者の年齢

	有効回答数	24歳以下	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60歳以上
実数	273	12	23	59	36	26	37	33	33	14
パーセント	100.0	4.4	8.4	21.6	13.2	9.5	13.6	12.1	12.1	5.1

(平均年齢等)

有効回答数	平均 歳	標準偏差 歳	最小値 歳	最大値 歳
273	42.0	11.7	21	85

(表 2-10-1-2) 回答者の性別割合

	有効回答数	男	女
実数	277	65	212
パーセント	100.0	23.5	76.5

(表 2-10-1-3) 回答者の現在の職名

	有効回答数	ケアワーカー	相談員	ケアマネジャー	看護師	その他
実数	259	90	9	96	19	62
パーセント	100.0	34.7	3.5	37.1	7.3	23.9

(表 2-10-1-4) 回答者の役職

	有効回答数	施設長	管理者	主任・リーダー	事務長	理事長	なし
実数	272	22	94	74	1	4	77
パーセント	100.0	8.1	34.6	27.2	0.4	1.5	28.3

(表 2-10-1-5) 回答者の所有資格

	有効回答数	看護師(准看護師)	介護福祉士	社会福祉士	ケアマネジャー	ヘルパー	その他
実数	264	41	167	8	120	83	21
パーセント	100.0	15.5	63.3	3.0	45.5	31.4	8.0

(表 2-10-1-6) 回答者の所属事業種

	有効回答数	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設(ユニット型)	認知症対応型共同生活介護事業	小規模多機能型通所介護事業	その他
実数	276	2	3	267	4	3
パーセント	100.0	0.7	1.1	96.7	1.4	1.1

(表 2-10-1-7) 回答者の所属事業所での勤続年数

有効回答数	平均 年	標準偏差 年	最小値 年	最大値 年
275	4.0	2.9	0.1	20.0

(表 2-10-1-8) 回答者の総介護経験年数

有効回答数	平均年	標準偏差年	最小値年	最大値年
273	9.8	6.5	0.9	41.3

(表 2-10-2-1) 放尿の解決経験の有無

	有効回答数	ある	ない
実数	273	245	28
パーセント	100.0	89.7	10.3

(表 2-10-2-2) 高齢者の年齢

	解決経験のある有効回答数	74歳以下	75～79歳	80～84歳	85～89歳	90歳以上
実数	228	27	32	81	56	32
パーセント	100.0	11.8	14.0	35.5	24.6	14.0

(平均年齢等)

解決経験のある有効回答数	平均歳	標準偏差歳	最小値歳	最大値歳
228	82.3	7.1	53	97

(表 2-10-2-3) 高齢者の性別割合

	解決経験のある有効回答数	男	女
実数	239	86	153
パーセント	100.0	36.0	64.0

(表 2-10-2-4) 認知症の原因疾患

	解決経験のある有効回答数	アルツハイマー型	脳血管疾患型	前頭側頭型	混合	その他
実数	236	154	48	1	16	17
パーセント	100.0	65.3	20.3	0.4	6.8	7.2

(表 2-10-2-5) 機能障害部位

	解決経験のある人	首	上肢	下肢	体幹	無回答(=なし)
実数	245	1	0	39	5	200
パーセント	100.0	0.4	0.0	15.9	2.0	81.6

(表 2-10-2-6) 食事介助

	解決経験のある有効回答数	全介助	一部介助	自立
実数	233	5	74	154
パーセント	100.0	2.1	31.8	66.1